秋田県立博物館研究報告第38号　45～54ページ　2013年３月
Ann. Rep. Akita Pref. Mus., No.38, 45-54, March 2013

秋田の先覚記念室企画コーナー展「ツツガムシに挑んだ秋田の医師たち～田中敬助・寺邑政徳～」展示報告

中村　美也子*

１．はじめに

秋田県立博物館内にある「秋田の先覚記念室」は、近代秋田の礎を築いた人物152名を紹介している展示室である。常設展示では58名の遺品や関連資料などを展示している。展示室内には、先覚者に関連した著作や図書の閲覧ができるコーナーや、一人一人の情報と関連施設を検索するPCを備えている。専用の収蔵庫があり、展示品以外にも資料を収蔵し、保存・管理している。

また、展示室の一部を使い、年に１回企画コーナー展を開催し、一人もしくは複数の先覚者について取り上げ、詳しく紹介している。

本稿では、秋田の先覚記念室で６月～８月にかけて行われた企画コーナー展「ツツガムシに挑んだ秋田の医師たち～田中敬助・寺邑政徳～」の展示内容と展示に至るまでの経緯、および付帯事業の内容について実施記録として報告する。

２．展示の趣旨

常設展示では、限られたスペース内で、58名がそれぞれ１～２点の資料と人物紹介のパネルで構成されている。常設で紹介していない先覚者は、PC検索でデータを提供する、または関連図書があるだけにとどまっている。どちらの場合も決して十分な人物紹介をしているとは言えない。そのため、人物にまつわる新資料の発見も兼ねて調査を行い、調査結果を踏まえて企画コーナー展を実施、それぞれの先覚者についてより詳しく紹介している。

今回調査対象として取り上げたのは平成24年に生誕150周年となる田中敬助、没後50年を迎える寺邑政徳で、両医師ともつつが虫病研究で尽力した人物である。節目の年に、改めて両名の業績と生涯について、つつが虫病の現在についても広く県民に紹介することを目的として展示を開催した。

３．資料調査の経緯

企画コーナー展を行うにあたり、次の機関および場所にて調査を実施した。調査箇所と資料は以下の通り。

秋田県立図書館：つつが虫病記述関連図書
秋田県公文書館：明治26年県議会記録
秋田県健康環境センター：つつが虫病判定器具
大仙市指定史跡「恙虫病研究所」：研究所内資料
大仙市～横手市河川敷：石碑等の民間信仰及びつつが虫分布調査
秋田市個人：つつが虫病関連写真パネル、データ、研究論文
大仙市個人：とげ抜き道具
湯沢市個人：田中敬助関連資料

調査開始当初は、当館での両名に関する収蔵資料が全くない状況であったため、つつが虫病について記述のある文献の調査から開始した。田中敬助についての基礎資料および情報については、湯沢市教育委員会に問い合わせ、関連図書や遺族・関係者の連絡先などをご教示いただき、直系の遺族は秋田県内にいないことがわかった。同じく文献調査で、秋田県公文書館では、明治26年の秋田県議会会議録を閲覧した。明治26年、秋田県はつつが虫研究調査費の支出を議決、研究を田中敬助に委嘱している。会議録では研究費支給の経緯やつつが虫病に関する当時の認識などを知ることが出来た。他に『秋田縣史 縣治部二第五冊』（1917）の衛生部分にあるつつが虫病についての記述原稿がないかを問い合わせたが、そちらは不明であった。

また、つつが虫病診断は現在、秋田県健康環境

* 秋田県立博物館

センターが医療機関の依頼を受けて行っており、ツツガムシの分布調査も実施している。展示では田中・寺邑両医師の業績のみではなく、つつが虫病の現在の状況も伝えるため、ツツガムシ分布調査に同行し、また現在の発生状況などを聞き取りした。さらに、つつが虫病に関連する民間信仰の碑などについても、現地にて案内してもらうことができた。今回確認できた碑や祠などは６地点となった（図１参照）。秋田県健康環境センター保健衛生部ウイルス班の佐藤寛子氏が発見した、民間で行われていたツツガムシ除去の治療に関連した個人所蔵の器具「とげ抜き道具」も確認することができた。

ツツガムシのついたネズミ捕獲用トラップ（矢印部分）

黒い布を使ったツツガムシの目視の様子

大仙市史跡文化財の「恙虫病研究所」は現在も寺邑政徳の子孫である寺邑能實氏が管理している。そのため、大仙市教育委員会から寺邑氏へ仲介をお願いし、研究所内部の資料調査を行った。後年他のツツガムシ研究者にも研究所として解放していたため、寺邑政徳の使用したものと息子・誠祐その他の研究者が使用した実験器具が混在しており、はっきり時代が特定できる資料が少なかった。器具以外に書類なども含めてリスト化するには、全資料を一度別施設に移してクリーニングしながら広げる必要があり、展示を前提とした今回の調査では時間的な問題もあり断念せざるを得なかった。その中で、寺邑政徳の功績を裏付ける賞与や写真などを寺邑氏の協力によって借用することが出来た。

秋田県におけるつつが虫病研究の第一人者である須藤恒久氏からは、歴史的な経緯やつつが虫病の基礎的知識及び、論文、写真等の提供を受けた。また、須藤氏が監修し毎年秋田県健康福祉部健康推進課が作成して医療関係機関へ配布している「つつが虫病のしおり」（平成 24 年版）の提供をうけた。さらに、須藤氏の仲介で田中敬助の遺族と連絡をとり、関連資料を新たに収集することができた。

（田中敬助関連の寄贈資料一覧は別表１）

４．展示構成と期間

【展示期間】

平成 24 年６月２日（土）～８月 26 日（日）

【展示構成】

展示は６つのテーマに分け、他につつが虫病について注意を喚起する VTR コーナー、関連図書の閲覧コーナー、さらにオリジナルのツツガムシに関するクイズを設置した。

テーマと主な展示資料は以下の通り。

（展示資料一覧は別表２）

１．秋田におけるつつが虫病の歴史
　菅江真澄著『雪の出羽路平鹿郡一』
　人見蕉雨著『黒甜瑣語』
　『重訂本草綱目』　　他

２．ツツガムシに挑む～田中敬助
　『東京医学会雑誌』第６巻第 21 ～ 23 号
　論文原稿
　ケダニスケッチ・写真
　論文抜刷（『ドイツ中央細菌学雑誌』掲載）
　　他

３．ツツガムシに挑む～寺邑政徳
　共著論文抜刷（『ドイツ中央細菌学雑誌』

掲載）
顕微鏡・恒温器・メスシリンダー
藍綬褒章賞状・褒章メダル　他

4．つつが虫病とは？～古典型と新型
とげ抜き（けぼり）道具

5．標本で見るツツガムシ
アカツツガムシ生体
ツツガムシ電子顕微鏡写真　他

6．つつが虫病研究の現在
須藤恒久著『新ツツガ虫病物語』
つつが虫病診断プレパラート　　他

その他．つつが虫病にきをつけよう！
ツツガムシクイズ

展示風景

5．付帯事業について

【講演会】

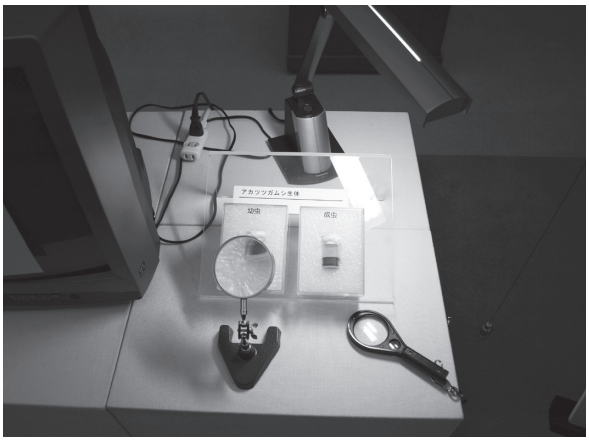
平成24年6月24日　午後2時～3時30分
場所：博物館講堂
講師：須藤恒久氏（秋田大学名誉教授）
演題：「ツツガ虫病、昔と今」
参加者：55名

秋田県におけるつつが虫病研究の第一人者から、つつが虫病の歴史的な流れから現在の発生状況まで幅広い内容で講演していただいた。参加者からは、「秋田にもツツガ虫病を発生させる種類がたくさんいることがわかった。野山に行って帰ったら入浴も。詳しい話がきけてよかった」(60代女性)「秋田県に住んでいながらツツガ虫病のことはよく知らなかった。しかし高校の時にツツガ虫病は秋田の風土病というふうにきき、興味をもった。どうして風土病といわれるのか、昔の状況、今の状況がよくわかった」(19歳女性）などの感想が寄せられ、過去の病気ではないことやツツガムシへの理解を深めて貰う機会となった。

【マイクロスコープで見るツツガムシ】

展示期間中の毎週土日（計22回実施）
場所：秋田の先覚記念室企画コーナー展内
参加者：188名（合計数）

愛知医科大学の角坂照貴氏より展示期間中に生きているアカツツガムシの成虫と幼虫の提供をいただき、公開した。1㎜に満たない大きさのため、普段は虫眼鏡で拡大して展示し、土日のみマイクロスコープにてモニターに拡大して見せるイベントをおこなった。生きているツツガムシを観察できる貴重な機会でもあり、家族連れなど世代を問わず参加があった。拡大して見せる他にツツガムシそのものに関する解説や病気についてもあわせて紹介し、興味を持った方に展示見学をすすめた。なお、提供をうけたツツガムシは病原体を持たないことを確認して貰い、展示室での漏洩がないよう、容器を二重に封入した状態で展示した。



ツツガムシ生体の展示

6．広報活動・来館者の動向など

今回の展示は医療関連の内容を含むため、秋田県内のつつが虫病診断を担当されている秋田県健康環境センターの佐藤寛子氏の協力の下、全国のツツガムシ関連の研究者にも広報して頂いた。その結果、県内の研究者にとどまらず、ツツガムシ生体標本提供者の愛知医科大学の角坂照貴氏をはじめ、関西方面や福島などの医療関連施設からも来館があった。また、県外から展示に関する問合せもあった。開催時期をつつが虫病発生時期と合

わせたが、秋田県内においては、来館者が興味をしめすことがあっても、展示のために来館するという状況までは至らなかった。しかし、計画していた講演会以外に、森吉公民館の講座にて紹介する機会を得られた。参加者は北秋田市でのつつが虫病発生状況への関心を示していたことから、農作業や山林へ立ち入る人達へ積極的に病気予防を含めて、展示の広報を検討してもよかったのではないかと反省される。

7．先覚者について

【田中敬助】

田中敬助は、文久２年（1862）６月９日、医師・種行の二男として秋田県湯沢市に誕生した。13歳で上京、医師となるべく東京外国語学校でドイツ語を学び、東京大学予備門を経て明治16年（1883）帝国大学医科大学（現東京大学医学部）に入学、明治21年（1888）に卒業した。

秋田へ帰郷して開業し、雄勝郡聯合町村医を嘱託され、明治23年（1890）公立横手病院長として招聘される。同年、医師として多忙な日々をおくりながら、自邸に「日本沙蝨病研究所」を設置し、当時“ケダニ”と呼ばれ、恐れられていたつつが虫病の研究に着手した。

明治25年（1892）、それまでの研究をまとめた論文の草稿を携えて、帝国大学医科大学衛生学教室に緒方正規（細菌・衛生学者、1853～1919）を訪ねて指導を受け、東京医学会例会において「秋田県の恙虫病」、「秋田縣下ノ恙虫病ニ就テノ『デモンストラチオン』」を発表し、当時新潟で日本洪水熱と呼ばれた風土病が秋田における“ケダニ”病と同一のものであるとし、感染経路、症状などを論証した。また『東京医学会雑誌』に論文「日本洪水熱病原研究第一回報告」等を発表、病気の媒介昆虫は“ケダニ”と呼ばれる微小なダニであることを確認し、診断には今で言う「刺し口」の発見が最も重要であると記した。

明治27年（1894）に秋田県よりケダニ病研究を委嘱され、公的な支援を得た。その公費から1,000円を費やしてドイツから撮影装置付顕微鏡を取り寄せ、診察しているとき以外は一日中顕微鏡をのぞく生活をおくった。明治32年（1899）には論文「ケダニ病の原因および病因に就て」（“Ueber Aetiologie und Pathogenese der Kedani-Krankheit”）を『ドイツ中央細菌学雑誌』に発表、その後も精力的に海外の学会誌へ寄稿した。

大正２年（1913）２月、論文「日本沙蝨病の研究報告」を東京帝国大学医科大学に提出、審査を通過し、50歳で医学博士となった。大正８年（1919）、文部省から年500円の科学研究奨励金を交付され、公職を辞して研究に専念した。

晩年も研究へ意欲的だった敬助は、昭和12年（1937）72歳で白内障を患い、新潟医科大学眼科に二ヶ月入院、手術によって回復する。昭和14年（1939）９月12日、それまでの生活を陰で支えていた妻貞子が75歳で死去、これらの出来事をうけて敬助は昭和15年（1940）に「毛蝨の予防法について」という一文を『日本医事新報』に発表した後、50年続けてきた「日本沙蝨病研究所」を閉鎖する。そして昭和16年（1941）、論文「私の恙虫病観」を『日本医事新報』967号に発表し研究生活に終止符を打った。昭和20年（1945）１月22日、敬助は83歳で死去した。

【寺邑政徳】

寺邑政徳は明治19年（1886）１月15日、寺邑貫三の長男として生まれた。寺邑家は代々医業を生業とし、初代瀬平、２代目甚五良と続き３代目三折の時に“ケダニ”病の診療に力を注ぐようになった。祖父にあたる４代目玄順はさらに専門医化し、５代目の父貫三はケダニ摘出法に熟達し、近隣から多くの患者が診療を求めて来るという状況であった。６代目となる政徳も医学の道へ進み、つつが

虫病研究に従事する。しかし教えを請うべき父は、明治40年（1907)、政徳が21歳の時に亡くなり、京都府立医学専門学校（現京都府立医科大学）で苦学しながら医業を修め、大正２年（1913)、東京の私立順天堂病院に約１年間勤務した。

郷里に開業してから、田中敬助に師事して本格的につつが虫病の研究を始め、田中と共同で論文を発表、病気の解明に没頭した。さらに田中の紹介で千葉医大教授の緒方規雄（1887～1970）と出会い、大正14年（1925）から緒方と共同研究を行った。

昭和２年（1927)、それまで様々な研究者が取り組みながら解明されなかった病原体について、緒方規雄がリケッチア・ツツガムシ説を発表する。政徳が昭和８年（1933）に設置した私設「恙虫病研究所」を活動の拠点とし、病原体の研究を行った。

昭和22年（1947)、60歳をこえたばかりの政徳は脳梗塞になり、医師としては事実上引退し長男誠祐が診療を引き継ぎ、つつが虫病研究は政徳・誠祐と緒方の３名で続けていくこととなった。

つつが虫病の病原体が発見されても、その症状に関しては昔と同じ対症療法しかなかった時期が続いていたが、昭和24年（1949）に大きな転機を迎えた。つつが虫病への化学療法はアメリカの進駐軍を中心に新潟で行われ、秋田においては、政徳がつつが虫病患者へパラアミノ安息香酸を投与し、効き目があることを確認、緒方博士と共同発表をする。後に他の抗生物質もこの病気へ効果があることが確認され、ようやくつつが虫病は治療法が発見された。

昭和30年（1955)、69歳をむかえた政徳は、それまでの研究に対し藍綬褒章を授与され、昭和34年（1959）には秋田県の文化功労章を受章する。政徳は研究のかたわら音楽を趣味とし、ピアノを弾くことで日頃の疲れを癒やした。それ以外は田中敬助同様、生涯を医療とつつが虫病研究に捧げた。昭和37年（1962）１月31日、政徳は76歳で生涯を閉じた。

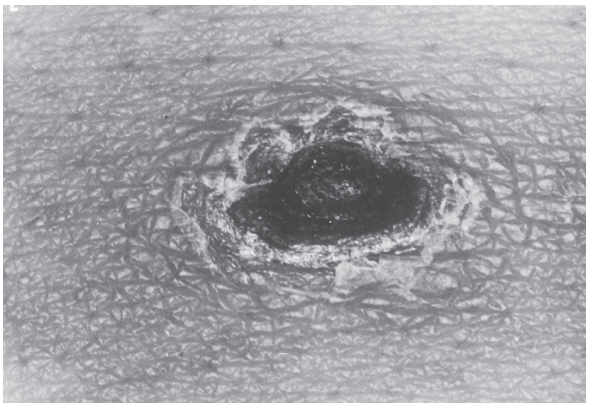
８．つつが虫病について

今回の展示において、二人の先覚者の業績を紹介するためには、ツツガムシとはどういうムシで、つつが虫病がどういう病気であるか、またつつが虫病にまつわる歴史などの説明を避けて通ることはできなかった。田中敬助や寺邑政徳が取り組んだつつが虫病と現在のつつが虫病は厳密には種類が違うものであることも、展示内で述べなければ、誤解をあたえる恐れもあった。本稿においても、つつが虫病やツツガムシについて、展示で紹介した内容を次に述べる。

【つつが虫病について】

つつが虫病は、「つつが虫病リケッチア（オリエンティア・ツツガムシ)」という病原体を持つツツガムシの幼虫に吸着され、体内に病原体が入った時に発病する感染症のひとつである。

つつが虫病の初めの症状は、ひどい風邪に似ている。潜伏期間７～12日を経て、身体がだるく食欲がなくなり、頭痛や寒気とともに39～40度の高熱がでる。発熱４、５日目に胸や背中、腹部にかけて発疹が現れ、腕や顔にも増えていく。また、吸着された部分に「刺し口」と呼ばれる特徴的なかさぶたができる。この頃までにつつが虫病との診断がつき、適切な治療をうけると速やかに治るが、投薬が遅れたりした場合、高熱が続く。一般的な風邪同様に自然治癒することもあるが、重症化すると数ヶ月の入院を要したり、死亡したりすることもある。治療薬とより迅速なつつが虫病の診断法が開発されているが、ワクチンや予防薬はまだ開発されていない。



ツツガ虫病の「刺し口」（拡大）

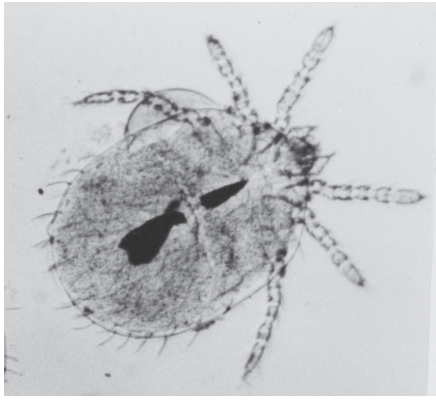
【ツツガムシについて】

ツツガムシはダニの一種で、現在120種類以上が確認されている。このうち、病原体をもってい

るのが、アカツツガムシ、フトゲツツガムシ、タテツツガムシの主に３種類である。しかし、親譲りの病原体を持っているのはそれぞれのごく一部に過ぎない。アカツツガムシによる場合は「古典型つつが虫病」と呼ばれ、田中敬助・寺邑政徳らが研究していたつつが虫病はこの種類によるもので、現在はこの種類による患者数は非常に少なくなっている。これには生息地域へ立ち入る機会が減ったことや河川改修などが関係している。他の２種類による場合は「新型つつが虫病」と呼ばれ、現在の患者のほとんどは「新型つつが虫病」によるものである。

ツツガムシは、卵からふ化して幼虫の時期を経て、２回脱皮した後に成虫になる。ふ化した幼虫は、一生に一度だけ動物の体液を吸うという性質があり、通常は野鼠などに吸着する。成虫は虫の卵などを食べるため、動物には吸着しない。このことから、３種類のツツガムシの幼虫が吸着活動をする時期だけが、つつが虫病に注意すべき時期ということになる。

また、つつが虫病に感染する要因となる環境は、かつて古典型つつが虫病が多く見られた河川敷のみではなく、現在は山林や田畑も含まれる。その変化に伴って患者の年齢層も変化している。古典型の患者の多くは夏に発生し、河川敷に草刈りなどで入る働き盛りの男性が多かったが、新型つつが虫病は、春秋の山菜採りや田畑、山林などの広範囲が感染要因となり、高齢者が多く、若年・幼児の患者もでている。



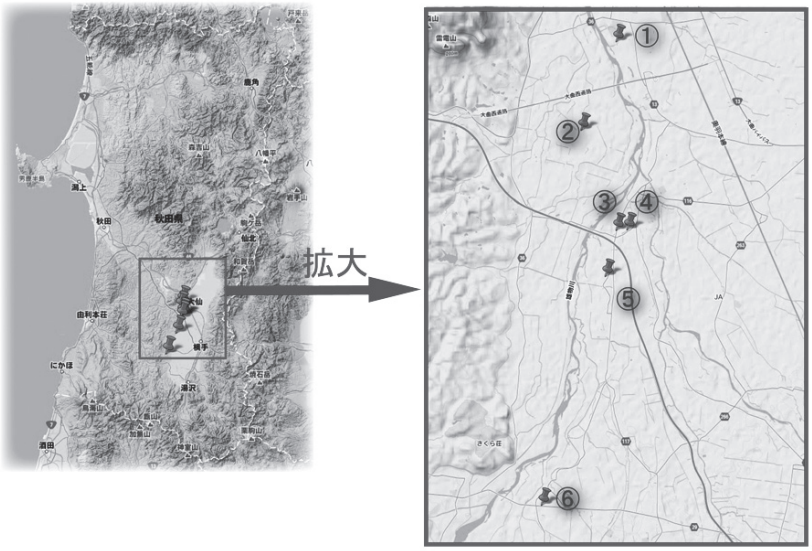
ツツガムシ（約 500 倍）

９．おわりに

今回の調査では、参考にした文献にある以上の新資料の発掘までには至らなかった。また、原資料の存在が確認できないものもあった。例えば、文政２年に大友玄圭が時の藩公に病気について詳しくまとめて上申したとされる『計多仁治験』や天保年間に米沢藩からの要請で須田春育が答申したとされる『毒虫治療之愚案』などは所蔵先が不明で原資料は未確認である。また、新潟など他の県でのつつが虫病研究まで踏み込むことが出来なかった。展示は「秋田」におけるつつが虫病に限定したが、それであってもより多くの資料を集める努力をすべきであったと悔やまれる点が多い。展示までの調査期間の不足が反省される。しかし、展示を通じて、秋田県においてこの病気を克服するために尽くした医師たちの存在とその業績を、限られた内容ではあったが紹介することができたのではないかと思う。

今回、田中敬助・寺邑政徳両医師の調査を行って、近代の医療に尽くした人物の資料が保存されている例が少ないことが分かった。現代も医学は日進月歩で技術や知識、医療機器が変化していくが、西洋医学が普及し始めた近代においても同様であろう。様々な仮説・学説が出る中で、当時画期的な発見・学説と思われたものが、後に否定されることも多い。田中敬助の場合も、つつが虫病病原体について、現在の医学においては間違いとなる原虫説を唱えている。新しい事実が発見され、学説が間違いであるとわかった時点で、それまでの研究に価値がないように扱われることは現代でもみられることである。より新しい発見や機器の進歩により、資料が保管されず、廃棄される対象となった可能性がある。田中敬助の資料も、失われる寸前で、ぎりぎり調査が間に合っての収蔵となったのは大きな成果となった。このように「秋田の先覚記念室」にて取り上げている人物も含め、郷土の医療に尽くした人物の資料は今後人物顕彰の上では貴重な資料となり、積極的に収集していく必要があると思われる。

図１　つつが虫病に関連した民間信仰



①

②

③

④

⑤

⑥

別表１　田中敬助寄贈資料一覧

整理番号	資料名	寸法（縦×横cm）・形状	点数	年代	備考
1	田中敬助肖像写真	13.5×9.3、紙焼き	1		
2	学位論文「日本沙蟲病の研究報告」	28.0×20.0	1	大正2年	大正2年2月13日学位授与
3	『東京医学会雑誌』第6巻第21号	25.5×17.5、雑誌	1	明治25年11月5日	田中敬助論文掲載「日本洪水熱病原研究第一回報告」
4	『東京医学会雑誌』第6巻第22号	25.5×17.5、雑誌	1	明治25年11月20日	田中敬助論文掲載「日本洪水熱病原研究第一回報告　第二」
5	『東京医学会雑誌』第6巻第23号	25.5×17.5、雑誌	1	明治25年12月5日	田中敬助論文掲載「日本洪水熱病原研究第一回報告　第三」
6	『東京医学会雑誌』第8巻第22号	25.5×17.5、雑誌	1	明治27年11月20日	田中敬助論文掲載「日本洪水熱病原研究第二回報告　第二」
7	『東京医学会雑誌』第8巻第24号	25.5×17.5、雑誌	1	明治27年12月20日	田中敬助論文掲載「日本洪水熱病原研究第二回報告　第三」
8	『東京医学会雑誌』第7巻第3号掲載論文別刷	25.5×17.5、論文	5	明治26年2月5日	田中敬助論文「日本洪水熱病者ノ熱ニ就テ」
9	『東京医学会雑誌』第23巻第13号掲載論文別刷	25.5×17.5、論文	1	明治42年07月05日	田中敬助論文「日本毛蟲病原研究追加第二」
10	第一回訂正論文原稿	28.0×20.0、原稿	1	明治43年11月	
11	論文原稿（ドイツ語）	24.4×36.0、原稿	2		田中敬助論文　タイプ原稿
12	自筆論文原稿（ドイツ語）	28.0×21.5、原稿	1	明治34年	田中敬助論文「Ueber　Kedani-Krankheit」
13	論文抜刷（ドイツ語）、自筆原稿（ドイツ語）	23.0×15.0、論文、原稿	2	明治39年、？	田中敬助論文「Ueber meine japanische Kedani-Krankheit」、「Ⅱ.Variola」
14	学生時代のノート	19.7×13.0、ノート	3		秋田羽後　学生　田中敬助（朱書きあり）
15	備忘録ノート	20.0×13.0、ノート	1	明治30年	住所あり
16	研究ノート	21.0×16.5、ノート	3	昭和2年、4年、5年	論文清書、研究ノート写
17	自筆原稿「日本沙蟲病の研究略報」	25.3×16.3、原稿	1		大正10年頃のまとめか
18	「日本毛蟲病の研究（田中敬助氏十八年の研究）」	25.0×18.0、ガリ版印刷	4		後世に編集されたもの、「日本沙蟲病の研究略報」を参照か
19	『東京医学会雑誌』第30巻第22号掲載論文別刷	25.2×17.7、論文	1	大正5年11月20日	田中敬助論文「日本毛蟲病原研究追加第三」
20	自筆論文「日本沙蟲病」	28.0×20.0、論文	1		表紙に「医学博士　田中敬助述」表記あり
21	原稿「文部省科学研究補助第1年報告」	25.5×17.0、原稿	1	大正8年12月23日	田中敬助・海輪十二共述論文「毛蟲（恙虫）擬赤虫、秋蟲ノ頭部「ヒポフワリンキス」及び毛蟲病ノ病原病理ニ就テ」
22	原稿「文部省科学研究補助第2年報告」	25.0×16.0、原稿	1	大正10年03月29日	田中敬助・海輪十二・鈴木周蔵・寺邑政徳共述論文「毛蟲患者血液ニ於ケル毛蟲毒検査成績」（『日本医事週報』に掲載）
23	『日本伝染病学会雑誌』第4巻第2号別刷	24.2×16.2、論文	1	昭和4年11月20日	田中敬助論文「臨床上ヨリ見タル毛蟲（恙虫）病の重要症例」
24	原稿「恙虫病」	26.0×16.5、原稿	2	昭和15年11月3日	田中敬助論文（『日本医事新報』第967号に掲載）
25	『Zentralbl.f.Bakt.Abt.I.Orig.Nr.178.』掲載論文別刷（ドイツ語）	25.0×18.0、論文	4	昭和5年	田中敬助・海輪十二・寺邑政徳・Kagaya共述論文
26	『Zentralblatt f. Bakteriologie,Parasitenkunde u. Infektionskrankheiten.』論文別刷（ドイツ語）	24.5×17.0、論文	1	昭和12年	田中敬助・海輪十二・寺邑政徳・Kagaya共述論文、図版写真原稿あり
27	論文別刷（ドイツ語）	24.5×17.0、論文	1	昭和12年	一部朱線あり、田中敬助論文か
28	『細菌学雑誌』	25.5×18.5、雑誌	6	明治37年～昭和15年	100号、163号、266号、270号、277号、531号
29	『東京医学会雑誌』	26.0×18.5、雑誌	2	大正7年、大正8年	第33巻第21号、第33巻第22号
30	『東京顕微鏡学会雑誌』	22.5×15.2、雑誌	1	大正5年2月	第23巻第1号、二木謙三論文掲載あり
31	『東京医事新誌』	22.0×15.0、雑誌	1	大正5年9月9日	第1989号
32	『日本医事週報』	26.0×18.8、雑誌	1	昭和15年3月23日	第45年第2242号
33	『北越医学会会報』	22.5×15.0、雑誌	1	明治39年2月	第151号
34	佐竹義輔　論文別刷	25.3×17.4、論文	1	昭和7年	「Juncaceae of Aleutian Islands,　cdlected by Mr. Y. KOBAYASI in1931.」
35	中島元徳　論文別刷	26.0×19.0、論文	1	昭和7年4月	「恙虫病、ロッキー山紅斑熱及発疹チフス各病原体リッケチアの鑑別に就て」
36	佐藤清　論文別刷	22.0×15.2、論文	1	昭和6年9月	「組織培養法による恙虫病々原体の培養成績の回顧と其批判」
37	大原八郎　論文別刷	26.0×19.0、論文	1	昭和4年4～5月	「野兎病ノ病理並二病原体二関スル実験的研究」
38	海野幸胤　論文別刷	26.0×19.0、論文	1	昭和3年11月28日	「家兎二ヨル恙虫病々毒ノ実験的研究」
39	岸田久吉　論文別刷	29.4×22.0、封書	1	昭和21年	「NOTES ON THE FAMILY TROMDIDIIDAE IN JAPAN」2部
40	北島多一・宮島幹之助　論文別刷	25.0×17.5、論文	1	明治43年12月10日	「恙虫病研究第四回報告」
41	林直助　論文別刷	26.0×18.5、論文	2	大正5年、大正8年	「恙虫病原研究追加並二標本示説」、「大正七年度余等恙虫病研究成績」

42	羽鳥重郎　論文別刷	26.0×18.5、論文	4	大正4年～大正9年	「台湾ニ於ケル発疹性腺腫熱調査報告(第一)」、「台湾ノ恙虫病ニ関スル続報(第四)」、「ON THE ENDEMIC TSUTSUGANUSHI DISEASE OF FORMOSA」、「台湾ノ恙虫病ニ関スル報告(第五)」
43	宮島幹之助　論文別刷	27.2×17.5、論文	5	大正5年～大正7年	「赤虫ノ発育環」、「「トロンビヂーデー」科諸幼虫ノ比較研究」、「ON THE LIFE CYCLE OF THE "AKAMUSHI"」、「赤虫小体ニ就テ」、「本邦内地朝鮮台湾産赤虫及其近似種ノ比較研究」
44	長與又郎　論文別刷	17.5×15.5、論文	7	大正4年～昭和6年	「恙虫病ニ就テ」、「恙虫ノ成虫及卵子ニ就テ」、「「トロンビヂウム」及赤虫(恙虫)に就て」、「「トロンビヂウム」及赤虫に就て」、「恙虫母虫体内ノ恙虫病原体ノ存否及ビ性状ニ就テ」、「恙虫ノ三種ニ就テ」、「UBER DEN NACHWEIS DES ERREGERSDER TSUTSUGAMUSHI-KRANKHEIT,DER RICKETTSIA ORIENTALIS.」
45	川村麟也　論文別刷	26.5×19.0、論文	11	大正4年～昭和12年	「恙虫病ニ於ケル発疹ノ組織的研究」、「大正七年恙虫病研究報告」、「鳥類ト赤虫トノ関係」、「恙虫病々原決定発疹チフス病原体の研究リッケッチャの検出法」、「恙虫病の研究室内一感染例」、「脂肪の一新染色法」、「実験動物体内に於ける恙虫病「リッケッチア」の形態学的証明」、「再び赤虫体内の「リッケッチア・アカムシ」に就て」、「恙虫病病原体ニ就イテ」、「地方病性発疹熱に就て」、「恙虫 Trombicula akamushi(BRUMPT) の生態的観察」
46	緒方規雄　論文別刷	23.5×16.5、論文	12	大正10年～昭和9年	「恙虫病病原研究予報」、「恙虫病々毒の性状に関する一新知見補遺」、「体外組織培養に於ける恙虫病々毒に就いて」、「動物屍体内に於ける恙虫病々原体 Rickettsia tsutsugamushi の生存期間」、「五日熱(塹壕熱)の病原に就いて」、「「マウス」を以て恙虫病々原体 Rickettsia tsutsugamushi の検出及恙虫病病毒の保存」、「恙虫病々原体 Rickettsia tsutsugamushi の研究」、「恙虫病々毒の実験的感染試験」、「恙虫病々原体リッケッチア・ツツガムシの海猥胎盤透過試験」、「恙虫病々原体「リッケッチア・ツツガムシ」の該患者尿よりの検出に就いて」、「内地発疹熱リッケッチアの実験動物殊にマウスよりの検出に就いて」、「神経黴毒とリッケッチア」
47	緒方正規　論文別刷	26.0×19.5、論文	4	大正2年～大正6年	「Dritte Mitteilung uber die Aetiologie und Therapie der Rattenbisskrankheit.」、「Uber die Kultur des Rattenbissfadenpilzes auf festen Nahrboden.」、「Achte Mitteilung uber die Aetiologie der Tsutsugamushikrankheit.」、「 恙虫病病原糸状菌ニ就テ」
48	緒方正規　論文別刷	26.0×19.5、論文	1	明治40年	「Mitteilung uber die Aetiologie der Tsutsugamushi=(Kedani) Krankheit.」
49	二木謙三　論文別刷	24.2×16.1、論文	1	大正6年	「鼠咬症病原「スピロヘータ」ニ就テ」
50	鞄	32.0×51.5×奥行15.0、革製	1		田中敬助使用鞄
51	飲食物殺菌法図解	75.0×58.0、着色	3	明治31年	印刷図解、一部欠落図あり
52	船の鉛筆画	77.0×58.5、紙製	1		子供の書いたものか
53	スケッチ「秋蝨」「擬赤虫」	62.0×47.5	2		
54	眼病トラホームの掛図　其一、其二	90×57.5、軸装、着色	2		2本組
55	今村保氏校閲「繻虫類」「コッホ氏之像　腸窒扶斯菌　虎列刺菌」「結核菌　ペスト菌　実扶的里亜菌　インフルエンザ菌」解説図	97.0×83.0、軸装、着色	1		3本組
56	外科解剖及内科病変一覧図	124.0×47.5、軸装、着色	1		
57	木箱	91.0×21.5×20.5、木製	1		軸入れ
58	ケダニスケッチ	27.8×19.1	1		着色
59	「沙蝨各臓器ノ説明」図版	29.5×25.5、写真	1		写真図
			124		

別表２　展示資料一覧

	展示形態	資料名	数量	年代
1	映像	感染症学会作成のビデオ	1	
2	写真	つつが虫病関連写真	10	
3	写真	田中敬助肖像写真	1	
4	写真	「沙蟲病調査所」写真	1	明治41年（1908）
5	写真	恙虫研究所全景写真	1	
6	写真	恙虫研究所前の記念碑写真	1	
7	写真	ツツガムシ電子顕微鏡写真	1	
8	書籍	『黒甜瑣語』初編、2篇　人見蕉雨著	1	寛政6年（1794）
9	書籍	『黒甜瑣語』人見蕉雨著	1	寛政6年（1794）
10	書籍	『黒甜瑣語』 2篇　人見蕉雨著	1	明治29年（1896）
11	書籍	『重訂本草綱目』　42巻	1	寛文12年（1672）
12	書籍	『国訳本草綱目』第10冊	1	昭和52年（1977）
13	書籍	『新ツツガ虫病物語』須藤恒久著	1	平成3年（1991）
14	資料	菅江真澄写本『雪の出羽路　平鹿郡一』	1	
15	資料	菅江真澄写本『雪の出羽路　平鹿郡十』	1	
16	資料	菅江真澄写本『月の出羽路　仙北郡五』	1	
17	資料	菅江真澄写本『月の出羽路　仙北郡一〇』	1	
18	資料	「刺抜き（けぼり）」道具	1	
19	資料	『東京医学会雑誌』第6巻第21号 田中敬助論文掲載「日本洪水熱病原研究第一回報告」	1	明治25年（1892）11月5日
20	資料	『東京医学会雑誌』第6巻第22号 田中敬助論文掲載「日本洪水熱病原研究第一回報告　第二」	1	明治25年（1892）11月20日
21	資料	『東京医学会雑誌』第6巻第23号 田中敬助論文掲載「日本洪水熱病原研究第一回報告　第三」	1	明治25年（1892）12月5日
22	資料	田中敬助論文　タイプ原稿（ドイツ語）	2	
23	資料	田中敬助自筆論文原稿（ドイツ語）「Ueber　Kedani-Krankheit」	1	明治34年（1901）
24	資料	田中敬助論文抜刷（ドイツ語）「Ueber meine japanische Kedani-Krankheit」、自筆原稿（ドイツ語）「Ⅱ.Variola」	2	明治39年（1906）、？
25	資料	田中敬助学生時代のノート	3	
26	資料	田中敬助備忘録ノート	1	明治30年（1897）
27	資料	田中敬助筆　ケダニスケッチ	1	
28	資料	田中敬助学位論文「日本沙蟲病の研究報告」	1	大正2年（1913）
29	資料	田中敬助の研究ノート	3	昭和2年（1927）、4年（1929）、5年（1930）
30	資料	田中敬助自筆原稿「日本沙蟲病の研究略報」	1	大正10年（1921）頃
31	資料	原稿「文部省科学研究補助第1年報告」 田中敬助・海輪十二共述論文「毛蟲（恙虫）擬赤虫、秋蟲ノ頭部「ヒポフワリンキス」及び毛蟲病ノ病原病理二就テ」	1	大正8年（1919）12月23日
32	資料	原稿「文部省科学研究補助第2年報告」 田中敬助・海輪十二・鈴木周蔵・寺邑政徳共述論文「毛蟲患者血液二於ケル毛蟲毒検査成績」	1	大正10年（1921）3月29日
33	資料	田中敬助論文原稿「恙虫病」	2	昭和15年（1940）11月3日
34	資料	「沙蟲各臓器ノ説明」図版	1	
35	資料	田中敬助・海輪十二・寺邑政徳・Kagaya共述論文『Zentralbl.f.Bakt.Abt.I.Orig. Nr.178.』掲載論文別刷（ドイツ語）	4	昭和5年（1930）
36	資料	田中敬助・海輪十二・寺邑政徳・Kagaya共述論文『Zentralblatt f. Bakteriologie, Parasitenkunde u. Infektionskrankheiten.』論文別刷（ドイツ語）	1	昭和12年（1937）
37	資料	寺邑政徳講演原稿	2	
38	資料	寺邑政徳論文「秋田縣に於ける恙虫病研究史」	1	昭和26年（1951）2月
39	資料	寺邑政徳論文「再び恙虫病々毒の実験的感染試験に就て」	1	昭和12年（1937）2月
40	資料	寺邑政徳論文「オーレマイシンを用いた恙虫病の治療実験例」	1	
41	論文	『日本沙蟲病之研究略報』田中敬助著	1	大正14年（1925）
42	論文	『日本沙蟲病の研究略報』田中敬助著	1	明治41年（1908）
43	論文	『秋田県下の恙虫及び恙虫病の研究１』寺邑誠祐著	1	
44	資料	顕微鏡（寺邑政徳・誠祐氏使用実験器具）	1	
45	資料	恒温器（寺邑政徳・誠祐氏使用実験器具）	1	
46	資料	天秤（寺邑政徳・誠祐氏使用実験器具）	1	
47	資料	メスシリンダー（寺邑政徳・誠祐氏使用実験器具）	1	
48	資料	褒章メダル（寺邑政徳・誠祐氏使用実験器具）	1	
49	資料	寺邑政徳　秋田県功労章	1	
50	資料	寺邑政徳　藍綬褒章賞状	1	
51	資料	ツツガムシ標本	2	
52	資料	「つつが虫病のしおり」	1	平成24年（2012）
53	資料	つつが虫病診断プレパラート	1	
		総展示点数	74	